

おがさわらまる 小笠原丸

おがさわらまる 小笠原丸は、国産初の旧 運信省(*4)の海底電纜(*5)敷設船で、昭和20年(1945)の終戦時は北海

道と樺太の間の海底ケーブルの設置に従事してい

ました。8月15日の終戦の玉音放送(*6)は

わっかないこう むか 稚内港で迎えました。

からふと ていしんきょくちょう ていしんしょうかんけいしゃ ひ
樺太にいた通信局長から通信省関係者の引き
あ たの おおどまりこう む よくじつおおどまり
揚げを頼まれ、17日大泊港に向かい、翌日大泊
こう さつとう ひ あ しゃ ろうじん こども
港に殺到していた引き揚げ者のうち老人・子供・
じょせいやく わっかない はこ おな
女性約1,500人を稚内まで運びました。

8月20日、再び大泊港に向かい、同じく1,
わっかないこう はこ やく げせん
500人を稚内港に運び、約887人を下船させ、翌21日午後4時、稚内港で下船しなかつた

* 4 通信省

戦前の官庁。郵便や通信を管轄していた。現在は総務省が管轄

* 5 海底電纜

海底ケーブル 海底に張った通信のための線

* 6 玉音放送

天皇陛下自らの声を録音したものを放送すること

やく 約 600 じょういん 人と乗員 86 けいびたい 人、警備隊 13 ごうけいやく 人合計約 7

00 の おたるこう む しゅつこう 人を乗せ小樽港に向けて出港しました。

わっかない げせん なか さい のち この稚内で下船した中には、まだ2歳だった後の昭和の名横綱大鵬幸喜(*7)がいました。

ひ お おがさわらまる こうかいとう てんとう ふね 日が落ちると小笠原丸は航海灯を点灯し、船の
い ち しめ むせんしんごう だ なんか 位置を示す無線信号を出しながら、南下していきました。航海灯をつけた船は攻撃されないと
アメリカ軍からの情報を得ていたからです。

ひ あ じゅうじ じょういん つか とうちょく 引き揚げに従事していた乗員は疲れから当直の
もの のぞ ひさびさ あんしん やす 者を除いて久々に安心して休んでいました。

みめい とつぜん ぎょらい おん さけ けいびへい こえ 未明、突然「魚雷(*8)音」と叫ぶ警備兵の声が
ひび あと うげん ほうこう ぎょらいおん 響きます。すぐその後「右舷(*9)方向、魚雷音
せっつきん つづ はんのう ふね 接近」と続きます。それに反応するかのように船
みぎ おお せんかい ぎょらい は右に大きく旋回しました。魚雷ははずれてい

* 7 大鵬幸喜

樺太生まれの第48代横綱。昭和の大横綱といわれた

* 8 魚雷

魚形水雷の略称。主に潜水艦から発射される

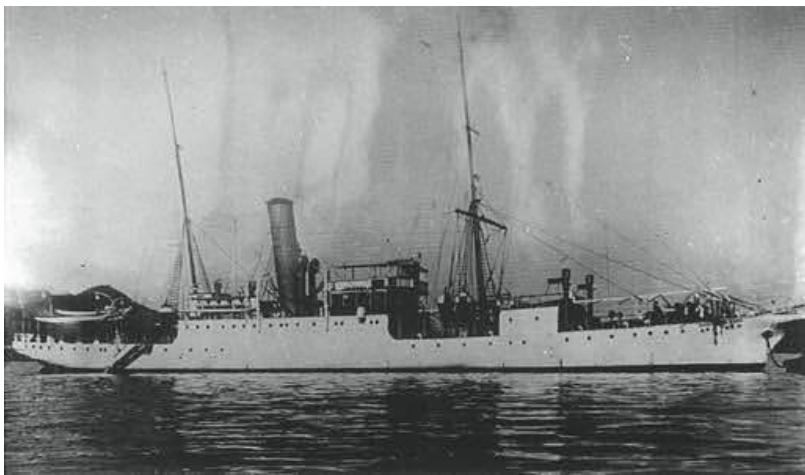
* 9 右舷

船の進行方向の右側

ふね しんろ もと もど
ました。しかし、船の進路を元に戻したそのとき
ぎょらいおん ふたた けいびへい こえ ひび わた
でした、「魚雷音」と再び警備兵の声が響き渡り
つぎ しゅんかんおお しょうげきおん じょうせんしや
ました。次の瞬間大きな衝撃音とともに乗船者
ゆか かべ ごぜん じ
は床や壁にたたきつけられました。午前4時22
ふん ふね しんすい すいちょく せんしゅ そらたか
分のことでした。船は浸水し、垂直に船首を空高
くつきだして、ごおーという音とともに海底へ沈
んでいきました。

なみま う ただよ もの ようしゃ きじゅう
波間に浮かんで漂っていた者には容赦ない機銃
そうしゃ にん
掃射(*10)があったということです。641人が
しほう い のこ もの にん せき
死亡し、生き残った者は61人だけでした。1隻の
きゅうめい たす にん たす あ
救命ボートが助かり、これに50人ほど助け上
げ、別荘(増毛町)の浜にたどり着きました。浜の
ひと い よう すがた きょうふ おぼ
人たちはその異様な姿に恐怖さえ覚えたそうで
す。その後、地元の漁師が舟を出し、遭難者の
そ う さ く にん きゅうじよ
捜索にあたり11人を救助しました。

* 10 機銃掃射 機関銃で敵をなぎ払うように射撃すること



かいていでんらんふせつせんおがさわらまる
海底電纜敷設船小笠原丸 (1,456トン)



か　いた
OGASAWARAMARU と書かれた板
からふといどうてん　てんじ
2019年の樺太移動展に展示された。